まえがき

「英語学」というと難しいという印象をもたれるかもしれませんが、英語という言語の音声（音韻）から意味の分野を研究することを「英語学」と呼んでいると考えてください。本書は、大学生や大学院生の皆さん、中学校・高校で英語を教えている皆さん、そして、今後小学校でも英語を教えることになる人たちにも、「英語学」で取り上げられる様々な問題を、わかりやすく「料理」して出すことに注意を払っています。各執筆者はこの「わかりやすく」を考慮しながらも最新の研究成果を踏まえて英語学のさまざまなテーマを論述する努力をいたしました。この意味ではすでに英語学を研究対象にされている皆さんにも参考にしていただけると思います。

本書は音声学・音韻論、形態論、統語論・意味論の分野に分けていますが、どの分野も互いに関連しています。特に、統語論と意味論は峻別することは難しいため、ひとつのまとまりとして区分しています。第11章を除いて、この各分野は古英語・中英語・近代英語に関する内容と現代英語に関する内容を論じています。また、本書は12章からなっていますが、本書を手にしてくださる読者の皆さんは興味ある章から読んでいただいても理解できるように構成されています。

各章の内容を簡単に記しておきます。

第1章では後期中英語から初期近代英語にかけて生じた大母音推移について考察しています。大母音推移とは強勢をもつすべての長母音が二重母音化する音変化です。この音変化は標準英語にのみ生じた現象として説明されていますが、英語以外のゲルマン語系の語にもよく似た母音変化が見られます。また、この連鎖推移は長母音だけに見られるのではなく短母音にも見られます。このような事実から、大母音推移は分節音の歴史的変化やプロソディとの相互作用の問題をも考慮しながら検討するべきと問題提起しています。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 2 章では現代英語の動詞の強勢について考察しています。例えば、acclimate や contribute のような 3 音節の動詞の強勢型をみると、3 番目の音節に主強勢が置かれるのは語末音節がフットを形成する場合のみです。このように動詞の強勢をフットと形態構造を考慮に入れるとうまく分析できる場合が多いという事実を明らかにしています。

第 3 章では古英語および中英語における複合語と統語句の区別は可能かについて考えています。古英語では語尾屈折が現在のドイツ語のように豊富でしたので、この点から複合語と句の区別ができる場合がありますが、中英語になると語尾屈折は消滅しますので、複合語と句を識別する手段がなくなります。

第 4 章は名詞 ice がいかなる接辞の助けもなく動詞 ice としても用いられる現象を調査・分析しています。なぜ名詞 ice がそのまま動詞としても使われるのかと言えば、これは語形成の一つである転換によるものです。ここではこの英語の転換を詳しく考察しています。

第 5 章では he doesn't care というところを he don't care が許されるという言語現象を歴史的事実の検証から説明します。don't と doesn't の頻度の推移、統語的・文体的特徴からみた使用状況などを調べることで、he don't care もかつては正しい用法であったことを実証しています。

第 6 章はコンテクストからは省かれている部分が特定できない省略と意味変化の関係を論じます。例えば、gold「金メダル」は gold medal という複合語からの省略であり、このような省略は特定の表現にしか見られません。この事実を説明するためには構文文法でいうところの構文化のモデルを用いるアプローチが有効であることを明らかにしています。

第 7 章は一見単純にみえる BE 動詞の用法について検討しています。BE 動詞は A is B のようなコピュラが一般的ですが、場所・時間を表す副詞句を伴う be here や be ＋現在分詞 / 過去分詞の場合など様々な用法がみられます。ここでは、このような多義ともいえる BE 動詞の働きを文法化という視点から論述しています。

第 8 章では Mary smiled a merry smile. のような同族目的語構文の統語的・意味的特徴について考えます。先ず、これらの特徴について述べ、

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

さらに同族目的語の解釈がどのようなものであるかを明らかにします。そののち、この解釈が同族目的語構文とその受動文の容認性とどのような関係にあるかという点を認知文法の視点で論じます。

第 9 章は部分構造とよばれている英語の A of B 形式の表現について考察しています。タイトルにあげている some of the books と some of them は表面上は部分・全体の関係であり、部分構造といえますが、それぞれの表す意味は同じではありません。そこで、このなぜ異なる意味になるのかという疑問を Jackendoff（1977）や田中（2017）に基づいて解決しています。

第 10 章では主節で表される内容に対する話し手のためらいを示す働きをする評言節とよばれる I mean と I know をとりあげて、語用論の基本的概念であるグライスの会話の公理とポライトネス理論に基づいて、その統語的・意味的特徴を明らかにします。

第 11 章はコロケーションという習慣的な語と語のつながりをとりあげ、これを語彙的、文法的、意味的観点から考察しています。また、コロケーションとイディオムの関係や認知文法の基本的概念であるメタファーからみたコロケーションについても説明を加えています。

最後の第 12 章は、いわば言語全体あるいは英語全体を一つの観点から捉えようとする場合の素描です。ここでは認知という一つの観点から、語の使い方や文法現象を説明するということはどういうことか、言語の特徴とされる要素の結合や再帰性（recursion）というのは認知的にどのように捉えられるのか、を考察します。また言語の類型、言語の起源・進化についても認知的な接近法が示されています。

最後になりましたが、本書を出版するにあたり、くろしお出版の池上達昭氏にはその企画の段階から校正まで貴重なご助言をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

2018 年 2 月　　米倉綽・中村芳久

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

1 「大母音推移」は本当にあったのか …… 1
—連鎖的母音変化をめぐる諸問題—
服部義弘

1. はじめに　1
2. 「大母音推移」についての従来の説　1
3. GVS をめぐるさまざまな問題　5
4. 社会言語学的考察　10
5. GVS を問い直す　13
6. 結び　16

2 動詞の語強勢と形態構造 …… 19
—acclimate はどのように発音されるのだろうか？—
山本武史

1. はじめに　19
2. 語強勢の概略　20
3. さまざまな動詞の強勢　24
4. おわりに　41

3 ice cream は語か句か？ …… 43
—古英語と中英語における複合語—
米倉　綽

1. はじめに　43
2. 現代英語における複合語と句を区別する基準とは？　44
3. 古英語と中英語における複合語　46
4. おわりに　59

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

4 なぜ ice は動詞としても使えるのか？ …… 63
—現代英語における転換—
長野明子

1. はじめに　63
2. 屈折と語形成　67
3. 可能な品詞の組み合わせ　68
4. 生産性を支えるもの　74
5. 同一性の条件　78
6. まとめ　83

5 He don't care の慎ましやかな訴え …… 87
—否定辞縮約形 don't と doesn't の競合の歴史—
中村不二夫

1. はじめに　87
2. *don't, doesn't* の初出と確立期　88
3. *He don't care* 語法の歴史　90
4. 結論　102
5. 追記　103

6 なぜ Gold だけで「金メダル」？ ……109
—省略と意味変化—
前田　満

1. はじめに　109
2. 復元不可能な省略　110
3. 構文的視点の重要性　115
4. ゲシュタルト化と省略$_2$　121
5. まとめ　125

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

7 変幻自在な BE 動詞の謎 ……127
—文法化の視点から—
保坂道雄

1. はじめに 127
2. コピュラ文と Predication 128
3. 進行形の文法化 132
4. 受動態の文法化 138
5. BE 動詞の文法化 141

8 Mary smiled a merry smile.は「陽気な微笑みを微笑んだ」? …143
—同族目的語構文の特性と意味解釈—
堀田優子

1. はじめに 143
2. 同族目的語構文の特性 143
3. 認知文法からみた同族目的語構文 148
4. 同族目的語構文の意味解釈 151
5. 同族目的語構文の解釈と受動文 154
6. まとめ 158

9 some of the books と some of them は同じ意味か? ……161
—A of B で表される部分・全体の関係の考察—
田中秀毅

1. はじめに 161
2. 先行研究における部分構造の分類 162
3. 部分構造の3分類と類別詞の機能 167
4. T 部分関係を表す部分構造の下位類 173
5. おわりに 177

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

10 I mean と I know の使用の傾向と動機を探る ……179
—語用論からみた評言節—
小林　隆

1. はじめに　179
2. 評言節とは？　179
3. 先行研究　182
4. 語用論の理論に基づく考察　183
5. 認知語用論的分析の可能性　194
6. おわりに　195

11 コロケーションとイディオムと認知 ……199
—語と語の結びつきを探る—
堀　正広

1. はじめに　199
2. コロケーションの定義　199
3. 語彙的コロケーション　200
4. 文法的コロケーション　202
5. 意味的コロケーション　203
6. コロケーションとイディオム　209
7. コロケーションと認知　210
8. 語順　216
9. おわりに　218

12 認知から言語をとらえる ……221
—超入門・認知言語学—
中村芳久

1. はじめに　221

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

2. 認知が語彙に反映するということ：動詞 *rise* の場合 222
3. 認知が文法に反映するということ：
主語と直接目的語の場合 228
4. 要素結合から再帰性（recursion）への認知的基盤 236
5. 2つの認知モード：言語の進化とタイポロジー 242
6. おわりに 247

索 引 249

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

1 「大母音推移」は本当にあったのか
―連鎖的母音変化をめぐる諸問題―

服部義弘

1. はじめに

アルファベットを構成する最初の 3 文字、すなわち A, B, C は、英語ではそれぞれ /eɪ/, /biː/, /siː/ と発音され、それがこれらの文字の名称となっています。これらの文字をこのように発音するのはローマン・アルファベットを用いるヨーロッパの主要言語の中ではおそらく英語だけではないでしょうか。たとえば、フランス語では A /ɑ/, B /be/, C /se/、ドイツ語では A /aː/, B /beː/, C /tseː/ というように、その母音部分はほとんどローマ字読みで発音すればよいようになっています。他の母音字、たとえば I や O なども、英語では、それぞれ、/iː/ でなく /aɪ/, /oː/ でなく /oʊ/ と発音されて、他の諸言語とは異なっています。なぜ、英語だけがこのような変則的な発音になっているのでしょうか。この問題を解く鍵は、かつて英語に起こったとされる大規模な母音変化の過程の中に隠されています。

以下、その母音変化について、まず、伝統的な考え方を紹介し、続いて、従来の定説についての問題点を指摘したうえで、新しい考え方を提示することにします。

2. 「大母音推移」についての従来の説

まず、以下の議論に入るまえに、議論の前提として必要な、母音の体系を構成する各母音とその分類上の名称を見ておくことにしましょう。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

2 動詞の語強勢と形態構造
—acclimate はどのように発音されるのだろうか？—

山本武史

1. はじめに

皆さんは acclimate という語を知っているでしょうか。もし、いま、初めてこの語に触れたとしたら、どう発音されると思いますか。これは「慣らす」という意味の動詞で、実は 3 種類の発音があります。[1] この発音のバリエーションは強勢（stress）の違いによるものです。

英語の強勢はさまざまな要因で決まりますが、まずその語の音節構造（syllable structure）が大きな影響力を持ちます。また、同じ音節構造をもつ語でも品詞によって強勢が異なることもあります。

ところが同じ品詞で音節構造が似ていても、強勢の位置が異なる場合もあります。次はすべて -fer で終わる動詞ですが、強勢の型は 2 つに分かれます。

（1）-fer で終わる 2 音節の動詞

a. defér, infér, prefér, refér

b. díffer, óffer, súffer

omít と vómit もどちらも動詞で形も似ていますが、強勢の位置は違います。この章ではこのような興味深い振る舞いを示す英語の動詞の強勢について詳しく見ます。

---

[1] 語の音形についての確認は主に Wells（2008）と Merriam-Webster（2003）を使用しました。音声表記の方法は変更してあります。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

3 ice cream は語か句か?
—古英語と中英語における複合語—

米倉　綽

1. はじめに

ここでいう語とは複合語（compound）のことであり、句とは統語句（syntactic phrase）のことです。現代英語（Present-day English）における複合語と句はどのように区別されているのでしょうか。たとえば、black board は「黒板」を意味する「形容詞＋名詞」からなる複合名詞（compound noun）なのか、「黒い板」を意味する名詞句（noun phrase）なのかは形のうえでは区別できません。「黒板」の意味であれば black と board を離して書かず、普通は blackboard と 1 語で書かれています。「黒い板」の意味であれば black board と離します。同じことは「暗室」や「クロウタドリ」にもいえます。「暗室」を意味する英語は darkroom であり、「暗い部屋」の意味であれば dark room です。「クロウタドリ」という椋鳥（むくどり）の一種は blackbird であり、単に「黒い鳥」を意味する black bird とは異なります。しかし、1 語で表されていようと 2 語で表されていようと、形態上の違いはまったくありません。したがって、これは複合語であるか句であるかの基準にはなりません。

日本語の場合は、複合語であれば「黒板」、「暗室」、「クロウタドリ」となり、名詞句であれば「黒い板」、「暗い部屋」、「黒い鳥」となります。つまり、日本語の名詞句の場合は第 1 要素が「黒い」、「暗い」という連体形の形容詞となり、形態上の区別が見られるので、語と句の区別は比較的容易です。また、複合名詞には life span「寿命」や ice cream「アイスクリーム」のように「名詞＋名詞」形からなる場合があります

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

4 なぜ ice は動詞としても使えるのか？
—現代英語における転換—

長野明子

1. はじめに

第 3 章では、ice cream が句であるか、複合語であるかを考えました。現代英語では、ice も cream も、名詞としてだけでなく動詞としても使えます。動詞としての ice について考えてみましょう。*The Oxford Dictionary of English*（Second edition, 2005）では、to ice は次のように定義されています[1]。

（1）a. “decorate（a cake or biscuit）with icing”
She poured three glasses of milk, and then went to help her mother ice the cake.
「彼女は牛乳をコップに 3 杯つぎ、それから母親がケーキに糖衣がけするのを手伝いにいった。」

b. ［*ice over/up*］“become covered or blocked with ice”
With the exception of a few duck-inhabited zones, it was all iced over.
「いくつかのカモ居住区を除いて、あらゆるところが氷で覆われていた。」

[1] 以下では品詞を明示する目的で動詞用法に接続詞 to を付けることがあります。to 不定詞の to は、*The Cambridge Grammar of the English Language*（2002: 1183–1187）では動詞句従属接続詞（VP subordinator）とされています。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

5 He don't care の慎ましやかな訴え
—否定辞縮約形don't とdoesn't の競合の歴史—

中村不二夫

1. はじめに

アメリカ合衆国に The Carpernters（1969–1983）という歌手がおりました。今なお筆者が最も魅了される歌手で、兄 Richard が楽器を、3 歳半下の妹 Karen がヴォーカルを担当する兄妹歌手でした。彼らの名曲の一つに "Ticket to Ride"（1969）という歌があり、He's got a ticket to ride / He's got a ticket to ride / He's got a ticket to ride / And he don't care.（あの人、もう切符を買ってるわ／あの人、もう切符を買ってるわ／あの人、もう切符を買ってるわ／私のことなんか考えてくれてもいないわ）という一節が出てきます。なぜ he doesn't care ではないのでしょうか。歌を聴いただけでは全然違和感はありませんでしたが、歌詞を覚えようと譜面を目にしたとき、学校で習った文法と違うので、つまりテストで点がもらえない語法だったので、疑問に感じた記憶があります。

インターネットで「カーペンターズ、He don't care」を検索にかけただけでも、元歌の The Beatles の曲がそうなっているのでそれを踏襲したのではないかとか、黒人英語（Black English Vernacular）にみられる三人称単数現在語尾の欠如をまねようとしたとか、*doesn't* より *don't* のほうが音符に合ったからなどと、取り沙汰されています。しかし、いずれも歴史的観点が欠如しています。

そこで、本章では、英語史の一学徒として筆者が 40 数年来抱き続けたこの謎を、自ら解き明かしたいと思います。*don't* と *doesn't* の歴史を知れば、特段驚くに値しないことがわかってきます。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

6 なぜ Gold だけで「金メダル」？
―省略と意味変化―

前田　満

1. はじめに

省略と意味変化の関係は、すでに 19 世紀の研究者も注目するたいへん興味深い現象です（Bréal（1900））。しかし、20 世紀の後半に入ると、この問題は研究者の関心から遠ざかり、現在ではほとんど忘れられた存在となっています。かりにそうだとしても、省略に伴う意味変化は、言語の本質に迫るうえで重要な示唆を数多く与えてくれます。そこで本章では、省略に関わるいくつかの意味変化のパターンを見たうえで、なぜそれが注目すべき現象なのかを説明していきます。

まず、話を始める前に、少々「省略」(ellipsis) ということばの意味について考えておきたいと思います。過去の研究では、このことばをたいへん広い意味で用いてきました。ふつう「省略」というと、わかりきった部分の繰り返しを避けるための発話の短縮を指します。たとえば、(1) では、B の発話の下線部の内容は、A の発話から容易に特定できます。

（1）A:　You *miss*ed.
　　B:　Yes, but you didn't _____.　（=you didn't <u>miss</u>.）
　　「君は失敗したね」――「うん、でも君は失敗しなかった」

このように、通常の省略では、省略される部分がコンテクストにてらして特定されねばなりません。これを専門的に「復元可能性の制約」(recoverability condition, RC) といいます。これは談話（discourse）に課

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

7 変幻自在な BE 動詞の謎
—文法化の視点から—

保坂道雄

1. はじめに

BE 動詞は、英語を学び始めて程なく接する基本的な動詞です。そのため、かえってその意味や用法の詳細についてはあまり注目されないのですが、(1) に見られる BE を説明するのは、それほど簡単ではありません。

(1) a. The capital of Japan is Tokyo.
b. I think, therefore I am.
c. He is watching a baseball game on TV now.
d. He was awarded the Nobel Prize for literature last year.

(1a) は、典型的な SVC（名詞句 + BE + 名詞句）の文で、前者の名詞句と後者の名詞句を入れ替えて、Tokyo is the capital of Japan. とすることも可能です。しかしながら、(2) では、こうした入れ替えはできません。

(2) a. Taro is a diligent student.
b. ?? A diligent student is Taro.

なぜこうした現象が見られるのでしょうか。また、This flower is beautiful. を和訳すると「この花は美しい」となり、この場合、日本語では BE を訳出しないほうが自然です。こうした BE 動詞はコピュラ（Copula）と呼ばれますが、一体どのような意味・機能を持っているのでしょうか。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

8 Mary smiled a merry smile. は「陽気な微笑みを微笑んだ」？
―同族目的語構文の特性と意味解釈―

堀田優子

1. はじめに

英語には、Mary smiled a merry smile. のように、文の形は「主語－動詞－目的語」の他動詞文の形をとっていながら、その形式においても、その意味においても、普通の他動詞文とは異なる特徴をもつ表現があります。上記の動詞 smile は自動詞であり、通常、目的語をとることはできません。そのうえ、目的語には、動詞と同形の名詞 smile をとっています。また、意味においても、普通の他動詞文とは異なり、上記の例文は「メアリは陽気な微笑みを微笑んだ」という意味ではなく、「メアリは陽気に微笑んだ」という意味になります。このように、動詞と形態的に同族の名詞（cognate noun）を目的語にとる、この種の構文は、「同族目的語構文（cognate object construction）」と呼ばれています。

本章では、英語の同族目的語構文を取り上げ、その統語的、意味的特徴を述べたあと、同族目的語の解釈がどのようになされているのか、そして、その解釈が同族目的語構文とその受動文の容認性とどうかかわるのかについて、認知文法の観点から述べていきます。

2. 同族目的語構文の特性

2.1 構文に現れる自動詞

（1）のような同族目的語構文には、普通の他動詞文とは大きく異なる特徴がみられます。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

9 some of the books と some of them は同じ意味か?
—A of B で表される部分・全体の関係の考察—

田中秀毅

1. はじめに

some of the books は「それらの本のうちの数冊」という意味ですが、some は some books のことで the books の一部分を指しています。このような A of B 形式は「部分構造」(partitive construction) と呼ばれています。この名称は、of の前の要素と後ろの要素が「部分・全体の関係」(part–whole relation) を結ぶことに由来します。

次の句も部分構造とみなされます。[1]

(1) a. a number of books「数冊の本」
b. two pages of the book「その本の 2 ページ」
c. two copies of the book「その本、2 冊」

どの句も some of the books に似ていますが、厳密には区別しなければなりません。(1a) は名詞 books が冠詞を伴わないため、不特定の本を指します。(1b, c) は book に冠詞がついていますが、(1b) の the book は手にとれる特定の本を指しますが、(1c) の the book は of の前に two copies とあるため、特定の本ではなく、タイトルを指していることにな

[1] 句や文に出典が示されていない場合、その容認性判断は筆者のインフォーマントによるものです

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

10 I mean と I know の使用の傾向と動機を探る
―語用論からみた評言節―

小林　隆

1.　はじめに

本章では評言節の中でも典型的で使用頻度が高いものの、あまり注目されてこなかった I mean と I know を取り上げ、グライスの会話の公理とポライトネス理論という語用論の基本的な理論に基づいて考察します。意味を辞書のように並べるのではなく、使用傾向を整理し、「なぜ用いるのか」という話し手の使用原理を探るのが本章の目的です。

2.　評言節とは？

評言節（comment clause）は Quirk et al.（1985）の用語で（秋元（2010: 1））、「一人称代名詞＋現在形の動詞」がもっとも典型的な形です。副詞の一つに分類され、文頭だけでなく文中や文尾にも出現します。また「早く小さく」発音され、ほかと分離したトーンユニット（tone unit）をもつのも特徴です。[1] Quirk et al.（1985）は評言節のタイプを 6 つあげていますが、なかでも I believe, I guess, I think, it is said, it seems など、次の例に見られるような主節由来のものを最も重要なタイプとして位置づけています。

[1] しかし Stenström（1995: 292）によると、I think と I mean に限っては、トーンをもたないためこの特徴が該当しないとしています。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

11 コロケーションとイディオムと認知
―語と語の結びつきを探る―

堀　正広

1.　はじめに

本章では、コロケーション（collocation）やイディオム（idiom）について理解を深めていきます。まずコロケーションとは何かについて概観し、特にコロケーションと意味との関係について少し詳しく見ていきます。そして、コロケーションとイディオムとの関係について考察した後に、認知言語学の概念メタファーとの関わりでコロケーションの新たな側面を浮き彫りにし、語と語との結びつきの問題を探っていきます。

2.　コロケーションの定義

習慣的な語と語とのつながりや単語の相性の問題として扱われるコロケーションは、次のように定義することができます。

> コロケーションとは、語と語の間における、語彙、意味、文法等に関する慣習的な共起関係を言う。　（堀（2009: 7））

次節において、コロケーションを語彙、意味、文法の面から考えていきますが、この他にも文化、レジスター、個人の文体とも関係があります。たとえば、文化との関わりについては、英語で bread and の次に来る単語を英米人に尋ねると bread and butter のように butter と答える人が多いでしょう。一方、日本人に「ご飯と」の次の来る言葉を聞けば、

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

12 認知から言語をとらえる
—超入門・認知言語学—

中村芳久

1. はじめに

ことばが、外界や内面を＜描く＞ということに異論をとなえる人はいないでしょう。しかし、描かれる外界や内面は、私たちが捉えた限りのものですから、＜描写内容＞には一定の＜捉え方＞が表裏一体のかたちで伴っています。したがって描写を専一とするとはいえ、言語を＜捉え方＞抜きに考察することはできないはずです。＜捉え方＞すなわち＜認知＞を中心に据え、そこから言語をとらえなおす作業が認知言語学で行われ、興味深い多くの成果があげられています。

メタファーやメトニミーでは特に、何を表しているかよりも、その背後でどのような認知が働いているかが重要で、それが、外界や内面を理解し構築する際の重要な認知能力だった、という人間の認知の根本にかかわることが明らかになりました。さまざまな文法現象についても、ラネカー（Ronald Langacker）の提唱する認知文法（Cognitive Grammar）の枠組みから、その背後に働いている認知プロセスが究明されています。文法化や言語習得の背後にある一般的（domain-general）な認知の仕組みが明らかにされており、単純な言語生得説ではもたなくなっています。言語によって好みの認知の仕方が異なれば、その観点からの認知的な言語対照や言語類型論が成立します。

進化生物学者ドブジャンスキー（T. G. Dobzhansky）の「進化の観点をぬきに学問は意味をなさない」という発言以来、あらゆる学問に進化・創発の説明が要求されますが、言語進化については、認知の観点からの

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers